

# 長岡京跡・淀城跡

2004年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

# 長岡京跡・淀城跡

2004年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

# 序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平米から、数千平米におよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび店舗新築工事に伴います長岡京跡・淀城跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

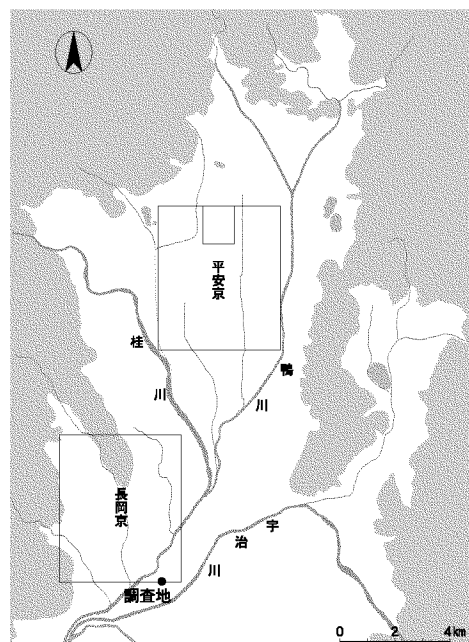
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

平成16年3月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 川 上 貢

# 例 言

- 1 遺 跡 名 長岡京跡・淀城跡
- 2 調査所在地 京都市伏見区淀池上町
- 3 委 託 者 株式会社京都銀行 取締役頭取 柏原康夫
- 4 調査期間 2003年11月13日～2004年1月21日
- 5 調査面積 280m<sup>2</sup>
- 6 調査担当者 内田好昭・鎌田泰知
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「神足」「納所」「円明寺」「淀」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡測量基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 13 遺物番号 掲載順に通し番号を付した。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子
- 15 基準点測量 宮原健吾
- 16 遺物復元 村上 勉・出水みゆき
- 17 整理作業 内田好昭・能芝妙子
- 18 本書作成 内田好昭
- 19 編集・調整 児玉光世・清藤玲子



（調査地点図）

# 目 次

1 . 調査に至る経緯と調査経過 .....	1
2 . 位置と環境 .....	2
( 1 ) 位置と環境 .....	2
( 2 ) これまでの調査 .....	3
( 3 ) 調査の目的 .....	4
3 . 遺 構 .....	4
( 1 ) 基本層序と遺構面 .....	4
( 2 ) 遺構の概要 .....	5
4 . 遺 物 .....	9
( 1 ) 遺物の概要 .....	9
( 2 ) 中世以前の遺物 .....	9
( 3 ) 江戸時代の瓦類 .....	11
( 4 ) 江戸時代の土器陶磁器類・その他の遺物 .....	13
5 . ま と め .....	14

# 図 版 目 次

図版 1	遺構	1 全景（南東から） 2 堤状盛土と柱穴群（北西から）
図版 2	遺構	土蔵跡（東から）
図版 3	遺構	1 東壁断面（北から） 2 土蔵礎石跡列断面（北西から）
図版 4	遺構	1 礎石跡17断面（北から） 2 布基礎11断面（西から） 3 礎石跡41断面（北東から） 4 拡張区、礎石跡104・布基礎105（北西から）
図版 5	遺物	1 中世整地層出土の土師器 2 中世整地層出土の瓦器・瓦質土器・須恵器
図版 6	遺物	江戸時代の軒瓦類
図版 7	遺物	ゴミ穴4出土土器陶磁器類

# 挿 図 目 次

図 1	調査位置図 ( 1 : 2,500 )	1
図 2	調査前全景 ( 南西から )	2
図 3	淀城下町復元図と調査地点 ( 1 : 10,000 )	3
図 4	東壁断面図 ( 1 : 100 )	4
図 5	断割調査区位置図 ( 1 : 400 )	5
図 6	中央断割調査区北壁断面図 ( 1 : 40 )	5
図 7	遺構実測図 ( 1 : 200 )	6
図 8	礎石跡列実測図 ( 1 : 100 )	7
図 9	柱穴群完掘状況 ( 東から )	8
図 10	ゴミ穴 4 実測図 ( 1 : 40 )	8
図 11	中世整地層出土緑釉陶器実測図 ( 1 : 4 )	9
図 12	中世整地層出土土器類・石製品実測図 ( 1 : 4 )	10
図 13	江戸時代軒瓦類拓影・実測図 ( 1 : 4 )	12
図 14	ゴミ穴 4 出土江戸時代土器陶磁器類実測図 ( 1 : 4 )	13
図 15	ゴミ穴 4 出土水滴実測図 ( 1 : 2 )	13

# 表 目 次

表 1	遺構概要表	5
表 2	遺物概要表	9
表 3	中世整地層出土土器類破片計測表	10
表 4	江戸時代瓦類破片計測表	11

# 長岡京跡・淀城跡

## 1. 調査に至る経緯と調査経過

この調査は、京都銀行の新店舗建設工事に伴う発掘調査である。

京阪淀駅近くの京阪電鉄側道拡幅工事に伴って、京都銀行の店舗が移転することになった。移転先は中央競馬会淀寮の敷地の北端部分である。この場所は淀城跡の範囲に含まれるため、京都市埋蔵文化財調査センターが試掘調査を行った。その結果、淀城期の遺構が残存していることが予測できたため、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を実施することになった。

2003年11月13日に調査を開始した。重機による表土の掘削を開始してまもなく調査区を東西に貫く形で大規模な土蔵跡を検出した。この遺構は、同時に西側で行った淀駅高架工事に伴う発掘調査区（03NG-YE002）にもものびる長大な遺構であった。古絵図と文献資料の調査を進めたところ、この土蔵跡が淀城の米蔵跡と判明したため、12月19日に報道機関への広報発表を行い、12月23日に現地説明会を開催した。現地説明会では約300名の参加があった。2004年1月14日に土蔵跡の礎石列の延長部分確認のために一部調査区を拡張した。また、淀城築城時の整地層を断割り調査したところ、淀城跡の下層に13世紀から14世紀の遺物を多く包含する整地層を確認した。1月16日にすべての調査を終了し、1月19日から21日にかけて事務所と周辺設備を撤去した。

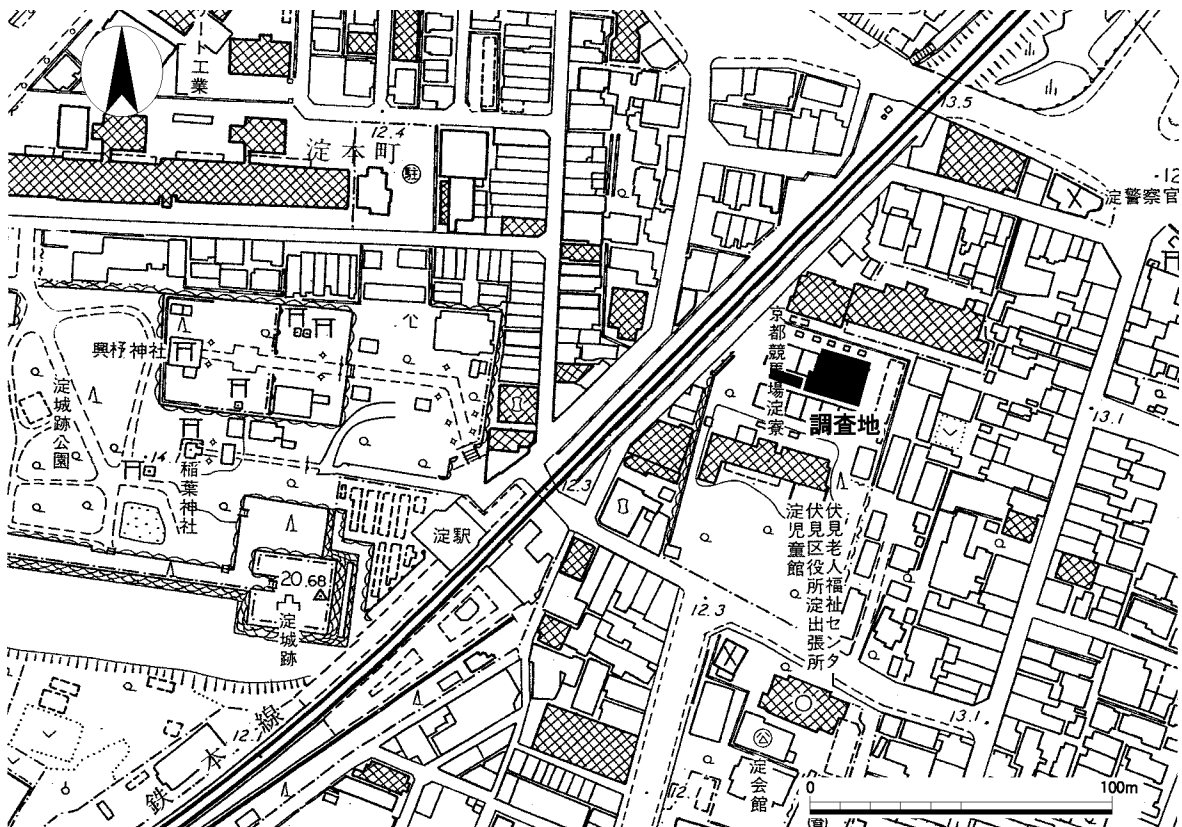


図1 調査位置図（1：2,500）

## 2 . 位置と環境

### ( 1 ) 位置と環境

桂川、宇治川、木津川が合流する淀は、古代から交通の要所であった。西日本から淀川の水運によって平安京に運び込まれる様々な物資は、「淀津」で陸揚げされるのが通例であった。中世には川の中島（現在の京阪淀駅周辺）に「魚市」が存在し、都に運び込まれる塩で加工した海産物や塩の販売を一手に掌握していた<sup>1)</sup>。また、戦国時代には戦闘の拠点として「淀城」がたびたび史料に登場するが、これは現在の納所付近に存在したようである。この古淀城は天正17年（1587）に淀殿の産所として豊臣秀吉によって修築されたが、伏見城の築城計画とともに廃城となった<sup>2)</sup>。

現在京阪淀駅の北西に隣接して石垣と堀が残る淀城は、廃城になった伏見城にかわる新たな京都護衛の城として、古淀城の宇治川を挟んだ対岸の中島に元和9年（1623）から寛永2年（1625）にかけて築かれた。最初の城主は松平定綱で、寛永10年（1633）には新たな城主である永井尚政が入城する。この永井藩政時代に木津川流路の移動による城下町の拡張が行われた。次いで、寛文9年（1669）には石川憲之、宝永8年（1711）には戸田光熙、享保2年（1717）には松平乗邑と相次いで城主が変わった。しかし、享保8年（1723）に稲葉正知が城主となった後は、幕末まで稲葉家が城主をつとめた。歴代城主はいずれも譜代大名であるが、慶応4年（1868）の鳥羽・伏見の戦いでは、敗走する幕府軍を入城させず、官軍側についた。このときの戦いで城下が焼亡した<sup>3)</sup>。

調査地は、淀城の「東曲輪」と呼ばれる地域の北端部分にあたる。東曲輪は、本丸、二ノ丸、三ノ丸からなる淀城の主郭部分を囲む堀の外側に位置し、淀藩の高位の家臣の屋敷が所在する地域である。東曲輪は外堀で囲繞され、その外側は町人が居住する町家地域である。調査地が中央競馬会淀寮の敷地の一郭であることは前述したが、この敷地は淀城を描いた江戸時代の各種の絵図に描かれており、淀城期の地割りを踏襲するものと思われる。現況では、南北約100m、東西約



図2 調査前全景（南西から）

60mの長方形で、周囲から50～130cm程度の比高差がある高まりとなっている。この敷地の北側と東側は外堀跡で、調査地の北端は堀の南の肩部分にあたる（図3）。

また、調査地は、周知の埋蔵文化財包蔵地としての長岡京跡にも含まれる。長岡京の条坊復元案は最近見直されたが、調査地は旧条坊復元案では左京九条三坊十三町にあたり、新条坊復元案では京外となる。



## (2) これまでの調査

これまでに淀城跡で行われた考古学的調査は、発掘調査1箇所、試掘調査4箇所、および立会調査30数箇所である。これ以外に伏見城研究会が行った2度の調査があるというが、詳細は不明である。<sup>4)</sup> 発掘調査は、1987年に天守台が全面調査されている。この調査で、地下に石積みの穴蔵を有する天守閣の土台構造が明らかになっている。<sup>5)</sup> また、この調査の後、淀城公園石垣改修工事の事前調査として、石垣の石材や刻印の調査などが行われている。<sup>6)</sup> 1976年に実施された試掘調査では、西ノ丸西側堀の東側石垣が検出されている。<sup>7)</sup> 1990年に実施された試掘調査では、内高嶋北側の堀の北側石垣が検出されている。<sup>8)</sup> 1996年の試掘調査では、本丸と西ノ丸の境界付近で、建物や塀に伴う3～4段の石垣を検出している。<sup>9)</sup> 2003年の試掘調査では、天守台南の内堀南肩の石垣、内高嶋北側の堀の南側石垣、および建物や塀に伴う石垣を検出している。<sup>10)</sup> 立会調査では、各地点で河川内の堆積、堀の堆積、城内の盛土などを確認している。<sup>11)</sup>

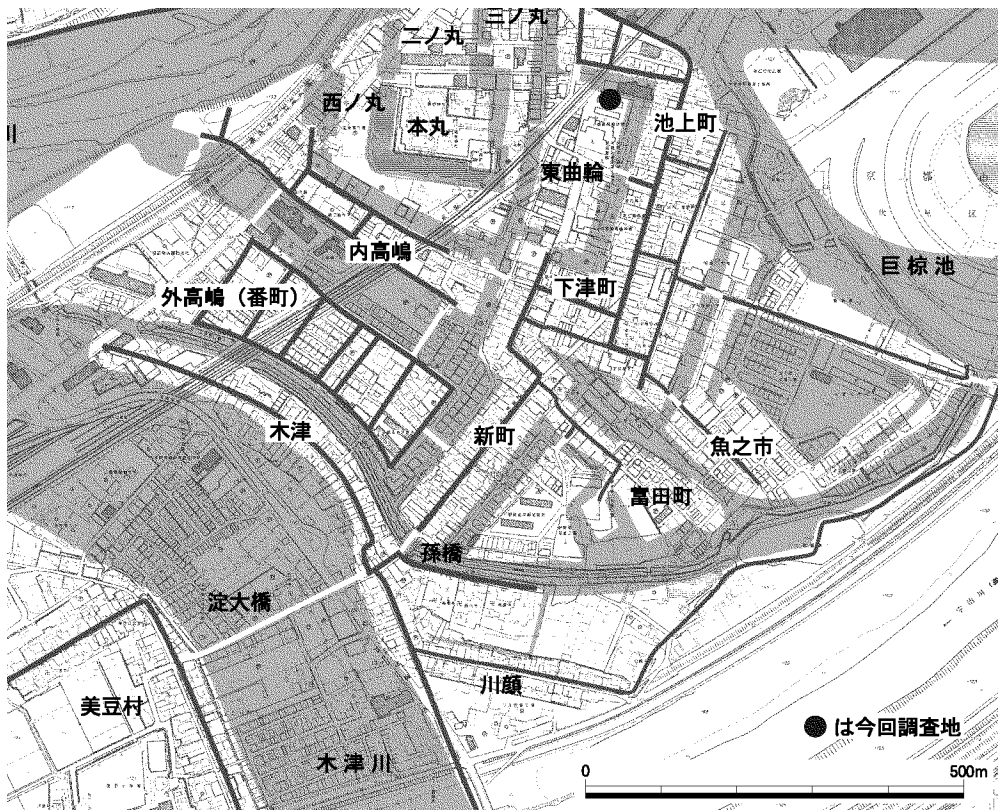


図3 淀城下町復元図と調査地点(1:10,000)

### ( 3 ) 調査の目的

以上に見たように、これまでの調査では主として淀城の平面形の復元に資する遺構と記録の保存を重視した調査がなされ、一定の成果を挙げてきた。今回調査でも、この方向性での調査成果を期待した。すなわち、調査地北端に東曲輪北側の外堀南肩を検出することを予測し、同時に東曲輪内の淀城関連の建物や施設の遺構を検出することを目指した。

さらに、川の中島に築造されたという淀城の地形地質的条件を明らかにし、同時に淀城跡の下層に中世以前の淀津関連、あるいは長岡京関連の遺跡を確認することを目的とした。淀城の土木工事や下層遺跡の状況の解明は、これまでの調査では不十分な調査条件のため明らかにできなかった点である。

## 3. 遺 構

### ( 1 ) 基本層序と遺構面

調査前の地表高は標高13.5m程度であったが、調査前に工事業者によって12.5m程度まで掘削が行われた。この間はすべて現代盛土である。現代盛土直下の調査区北半は灰オリーブ～灰色シルトの整地層を検出した。現代盛土直下の調査区南半は軟弱な砂礫の整地層を検出した。これらの整地層の上面が淀城期の遺構面であり、整地層は淀城築城期の盛土である。淀城築城期の整地層を何箇所かで断割り、淀築城時の整地層とその下層の堆積状況を調査した(図5)。整地層のうち、北側のシルト部分は東西に延びる堤状の高まりである。砂礫の整地層はその上位に乗る。整地層の厚さは最大で約1.5mある。これによって、淀城東曲輪は1.5m以上の盛土の上に成立していること、まず曲輪の外周に締まりの良いシルト質の土砂で堤状の高まりを作りその内側に砂礫

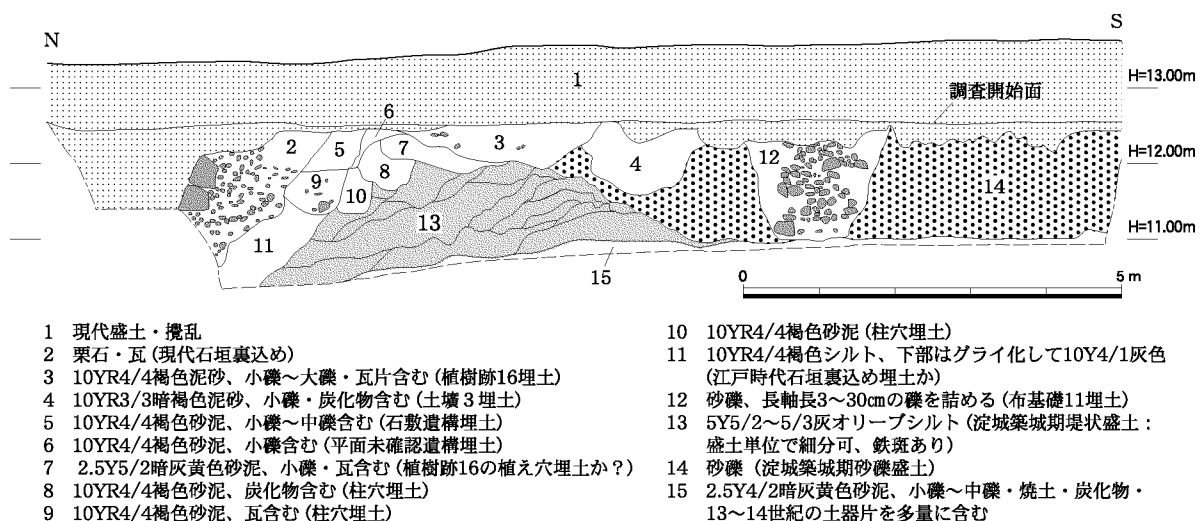


図4 東壁断面図(1:100)

を充填していることなどがわかる。堤状盛土のシルト質土中には積み上げの順序がおよそ確認できる。曲輪の内側から堀側にむかって少しずつ盛り上げられている状況である。また、盛土に用いられた土砂には全体的に不定方向の鉄斑の沈殿がみられ、近隣の自然堤防上の耕作地や植生の進入した場所の表層に近い土を二次的に積み上げたものと判断できる。一方、内側の砂礫は木津川等の川原に豊富に存在するものである(図4、図版3-1)。

淀城期整地層の下面には、13~14世紀の土器類を多量に包含する整地層がある。この整地層は厚さ約70cm(標高11.0~10.3m)あり、薄い整地層数枚に区分できるように見える箇所もある。また、土壌などの遺構が密集するようであるが、湧水のため明確にすることはできなかった。この整地層の下層に、水成砂層を挟みながらさらに2~3枚の整地層(10.3~10.0m)があり、ここからも土師器の小片が出土している。これより下は自然堆積層と思われる灰色シルト層で、遺物は得ていない(図6)。以上のように、中世以前の整地層の各上面で遺構が検出されることが予測されたが、湧水等の様々な制約のため、今回の調査では平面的な調査を行うことができなかった。

## (2) 遺構の概要

調査区南半で、東西に長い大規模な土蔵跡を検出した。土蔵跡は、布基礎11とそれに直角に取りつく布基礎12・42・105、および東西

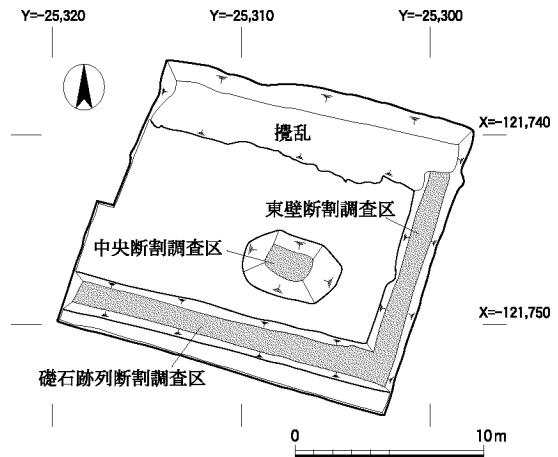
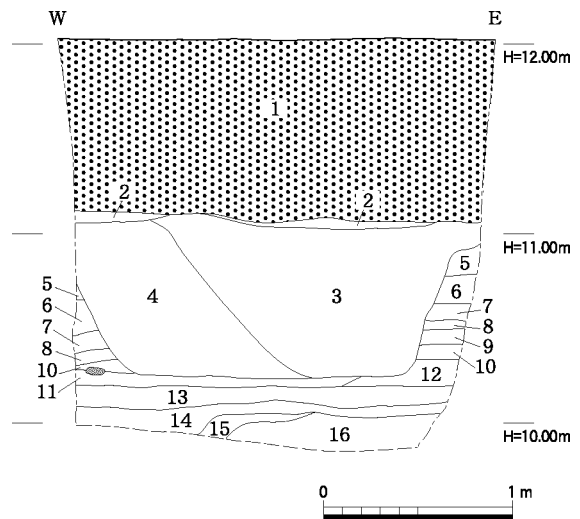


図5 断割調査区位置図(1:400)



- 1 砂礫(淀城築城期の盛土、図4の14と同じ)
- 2 10YR5/2灰黄褐色シルト(水成層)
- 3 10YR3/1黒褐色砂泥、小礫~中礫を含む(遺構埋土)
- 4 10YR3/2黒褐色砂泥、小礫~中礫を含む(土器片を含む埋土)
- 5 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥(整地層)
- 6 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥(整地層)
- 7 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、小礫を多く含む(整地層)
- 8 10YR4/2灰黄褐色砂泥(整地層)
- 9 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥(整地層)
- 10 10YR4/2暗灰黄色砂泥(整地層)
- 11 10YR5/3にぶい黄褐色砂礫(水成層)
- 12 10YR4/2灰黄褐色砂泥(整地層)
- 13 10YR4/3にぶい黄褐色粗粒砂(水成層)
- 14 7.5YR4/3褐色砂泥(整地層)
- 15 10YR4/2灰黄褐色泥混じり砂礫(整地層)
- 16 10Y4/1灰色シルト(自然層か整地層が不明)

図6 中央断割調査区北壁断面図(1:40)

表1 遺構概要表

時期	遺構
江戸時代	土蔵跡(布基礎11・12・42・105、礎石跡9・10・17・41・104・106)、植樹跡16・45、ゴミ穴4、土壌3、柱穴群、堤状盛土

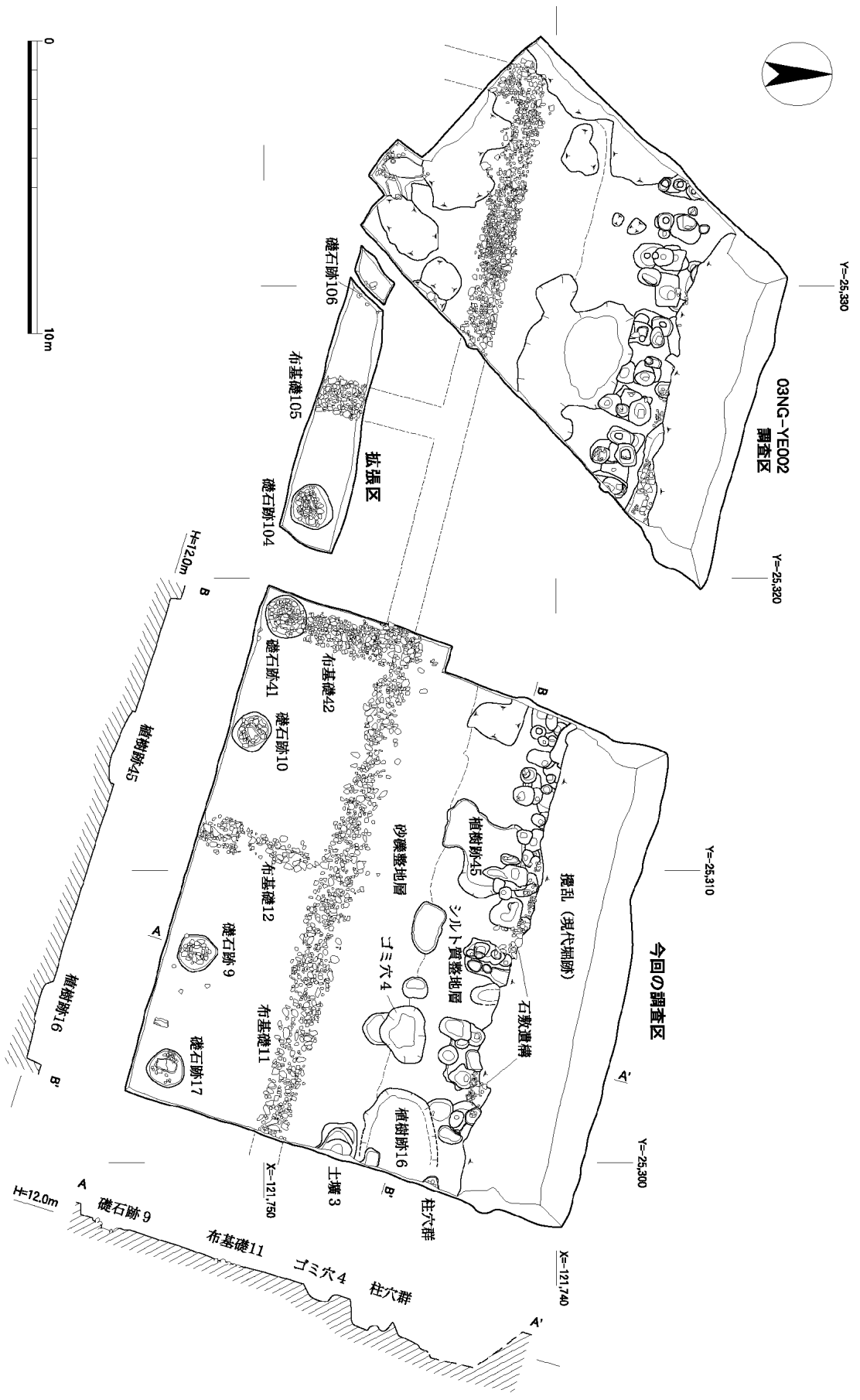


図7 遺構実測図(1:200)

方向に一直線に並び礎石跡9・10・17・41・104・106で構成される1棟の建物跡である(図版2)。布基礎11は土蔵の北面の外壁基礎、布基礎12・42・105は土蔵内部の空間を仕切る構造壁、礎石跡列は棟持柱列と考える。布基礎は幅2～3m、深さ1～1.5mの溝状遺構で、内部に長軸長10～40cmの礫を充填し、整地層と同じ砂礫で埋める。礫種は砂岩、頁岩、チャートなどの川原石と花崗岩石材の転用礫などからなる(図版4-2)。礎石跡は直径3～4mのおそらく円形の掘形内部に布基礎と同様の礫を充填し、中央に長軸長70～80cmの礫を2段以上重ねて据え、布基礎と同様整地層の砂礫で埋めるもので、礎石の重量を支える基礎地業である。礎石本体はさらに上部に存在したものであるが、後世の削平によって失われている(図版3-2・4-1)。礎石芯々間の距離は約4m(京間2間)である。また、礎石列と北面外壁の布基礎11との芯々間の距離も約4mである。この土蔵跡は西側に隣接する03NG-YE002調査区で西端が検出されており、建物全体の復元案を示すことができる。3列ある建物内部の壁のうち、礎石跡41を伴う布基礎42を土蔵の中心と考えることができる(図版4-3)。ここから03NG-YE002調査区で検出されている建物西端までは5間分あるため、検出されていない土蔵の東端は布基礎42から東へ5間分の地点に想定できる。以上により、この土蔵は梁間2間(約8m)、桁行10間(約40m)の東西棟と考える。なお、布基礎と礎石跡の掘形は、断面観察では確認できるが、平面調査ではまったく検出できなかった。

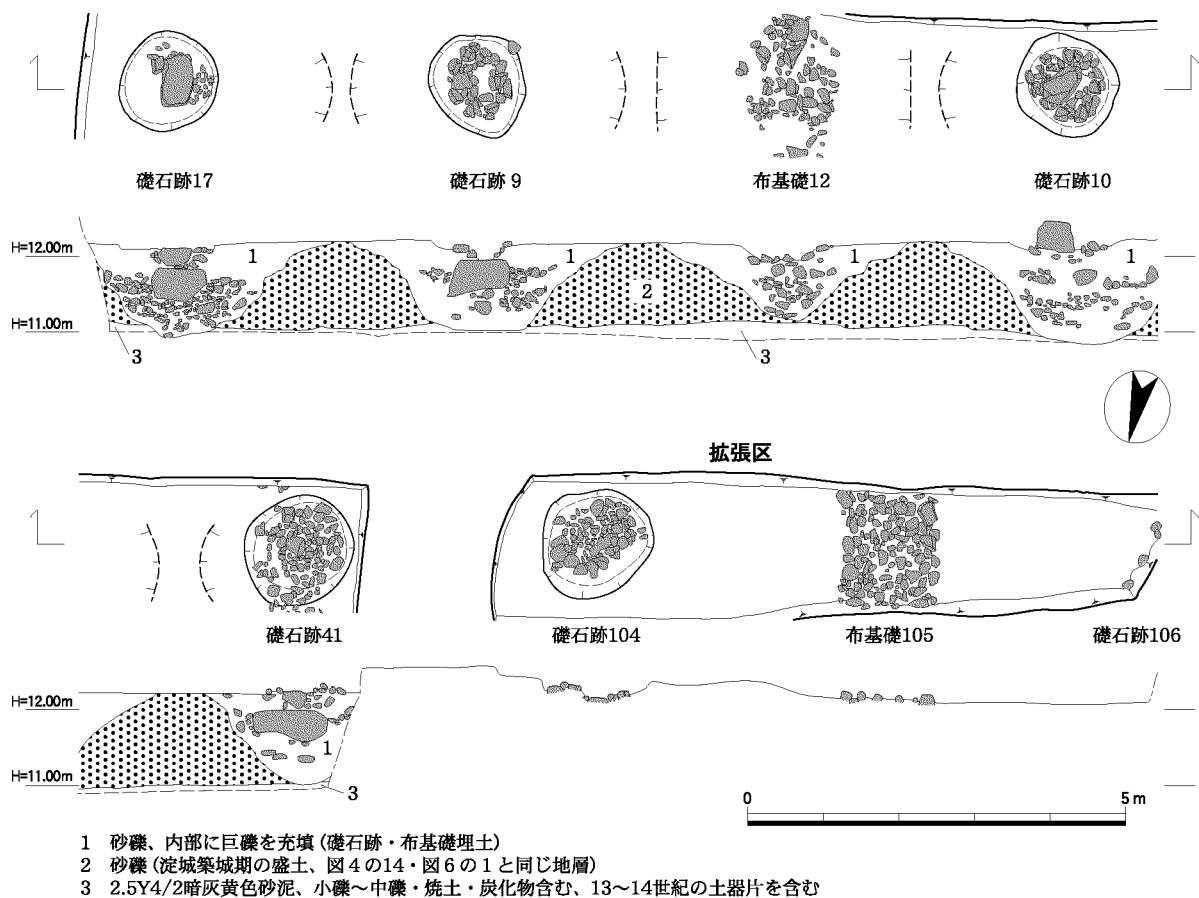


図8 礎石跡列実測図(1:100)



図9 柱穴群完掘状況（東から）

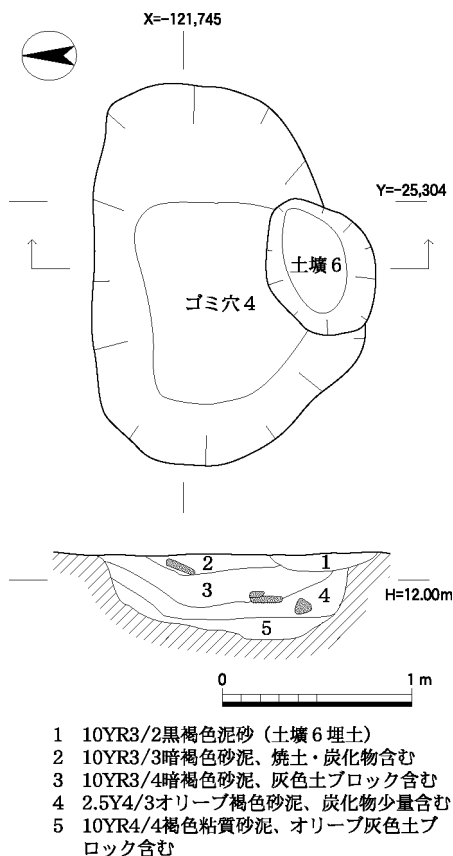


図10 ゴミ穴4実測図（1：40）

平面で検出した礎石跡の直径1.2～1.5mの掘形は、土蔵解体時の礎石の抜き穴と考える。断面観察で判明した布基礎の掘形幅は2.0～3.5m、礎石跡の掘形直径は3.5～4.0mである（図8）。

調査区の北辺で南北方向の攪乱を検出した。南側は現代の石積擁壁となっている。古絵図との対比によれば、この攪乱は淀城の東曲輪の北を画する外堀が昭和時代まで残存したものであることが明らかである。現代の擁壁によって破壊されているため、淀城時代の石垣等を検出できず堀の南肩部の状況を確認することができなかった。ただし、淀城を描いた古絵図には、調査地付近の堀に石垣を描いていないものがあり、素掘りの堀であった可能性もある。

この堀跡の南肩部部分で、堀に平行する方向に集中して延びる約50基の柱穴群を検出した（図版1-2）。柱穴は複雑に重なり合って東西方向に延び、一部の柱穴は底に根石がある（図9）。この柱穴群は、外堀南肩部に存在した堀の控え柱の跡と考える。堀そのものの建替えや恒常的なメンテナンスによって、多くの柱穴が穿たれたものと理解する。柱穴群と堀跡攪乱の間に南北方向の石敷遺構が部分的に残る。これが堀本体の基礎部分と考えるが、一部の控え柱の上に重なること、瓦片を伴うことなどの点から、築城当初のものではなく、建て替えられた堀に伴うものであろう。

柱穴群の南には、植樹跡16と植樹跡45がある。いずれも不定形な平面形と断面形であること、内部に樹木の根の痕跡が顕著であること、埋土に多量の瓦を含み人為的に埋められた堆積状況を示すことなどから、植樹の痕跡と考えた。植樹跡16は重機掘削時に掘りすぎたため東半を失ったが、東壁断面で確認できた（図4）。

植樹跡16の西方に、ゴミ穴4がある。ゴミ穴4は埋土にレンズ状の堆積が観察でき、一定期間を経て徐々に埋められていったものと判断できる（図10）。18世紀代の土器陶磁器類がまとまって出土した。

## 4 . 遺 物

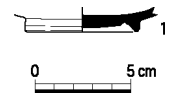
### ( 1 ) 遺物の概要

遺物は遺物収納用コンテナ ( 54 × 34.5 × 15cm ) に80箱出土し、整理・分類過程で90箱に増加した。内容は、土器陶磁器類、瓦類、石製品、金属製品、骨製品、礫・砂のサンプル等である。木製品は出土していない。出土遺物全体の約7割を江戸時代の瓦類が占め、江戸時代の土器陶磁器類がこれに次ぐ。中世以前の土器類は4箱分出土しているが、狭い断割調査区内における確認調査の出土量としては多量である。調査区全域に包含されていた中世以前の土器類の量はかなりの量に及ぶものと推測する。石製品、金属製品、骨製品は微量である。また、布基礎11に充填されていた礫86点を、東壁断割調査区西壁付近で任意に抽出しサンプルとして採取した。さらに、淀城築城時の砂礫整地層の砂礫 ( 遺物収納用コンテナ1箱分 ) をサンプルとして採取した。いずれのサンプルも、淀城の土木・建築工事に用いられた礫と砂礫の供給地点を明らかにするための資料として、今後の活用が見込まれるものである。

### ( 2 ) 中世以前の遺物

淀城下層の整地層から出土している中世以前の土器類は、長軸長1.0cm以上の破片で1,885個、17,328gが出土している。

平安時代の遺物としては、中世整地層から出土している緑釉陶器の皿が1点あり、高台部分の破片で、10世紀初頭の京都産である ( 図11 )。平安時代中期以前まで遡る遺物は、この1点のみである。



中世以前の遺物の主体は、12世紀から14世紀にかけての土器類である。中でも13世紀以降の資料が豊富である。大半が淀城下層の整地層から出

図11 中世整地層出土  
緑釉陶器実測図 ( 1 : 4 )

表2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
平安時代～ 室町時代	緑釉陶器、土師器、須恵器、 瓦器、石製品	4箱	緑釉陶器1点、土師器18点、 瓦器15点、瓦質土器6点、 須恵器2点、石製品1点	2箱	1箱
江戸時代	土師器、土師質土器、土製品、 施釉陶器、焼締陶器、磁器	15箱	土師器4点、土師質土器3点、 土製品2点、施釉陶器4点、 磁器4点	1箱	13箱
	軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、 軒棧瓦、棧瓦、熨斗瓦、塀瓦、 棟丸瓦、輪違瓦、棟端瓦、 雁振瓦、袖瓦	61箱	軒丸瓦7点、軒平瓦7点、 棟丸瓦8点	4箱	56箱
	骨製品、金属製品、石製品、	3箱	銅製品1点	3箱	0箱
	石サンプル、砂サンプル	7箱		7箱	0箱
計		90箱	83点 ( 3箱 )	17箱	70箱

表3 中世整地層出土土器類破片計測表

種類	破片数		重さ	
土師器皿類	1,009個	53.5%	4,482g	25.9%
土師器煮炊具	95個	5.0%	1,826g	10.6%
瓦器碗皿類	564個	29.9%	2,647g	15.8%
瓦質土器	53個	2.8%	746g	4.3%
須恵器	65個	3.5%	2,278g	13.2%
施釉・焼締陶器	72個	3.8%	3,333g	19.2%
貿易陶磁	15個	0.8%	144g	0.8%
瓦	9個	0.5%	213g	1.2%
その他・不明	3個	0.2%	1,643g	9.5%
合計	1,885個	100.0%	17,382g	100.0%

土している。食器類は土師器皿類と瓦器碗皿類で構成される。土師器皿類が瓦器碗皿類のほぼ倍量ある。瓦器碗は大半が楠葉型で大和型を少量含む。煮沸具は、土師器甕と瓦質土器鍋・釜で構成される。これも土師器の煮沸具が瓦質土器のほぼ倍量出土している。貯蔵具は須恵器甕と備前を主体とする陶器甕がほぼ同量出土しているが、やや陶器が優勢である。これらに須恵器片口鉢と貿易陶磁が加わる。貿易陶磁は、鎬蓮弁の青磁碗や白磁壺などの中国製の小片が14片出土している。全体的に13世紀後半代の資料

である。中世の瓦類は少量出土しているが、軒瓦は無い。なお、上記以外に滑石製石鍋、碁石、砥石などの石製品が出土している。

代表的な遺物を図示し(図12、図版5)、概説する。2~16は土師器皿類である。口径8cm前

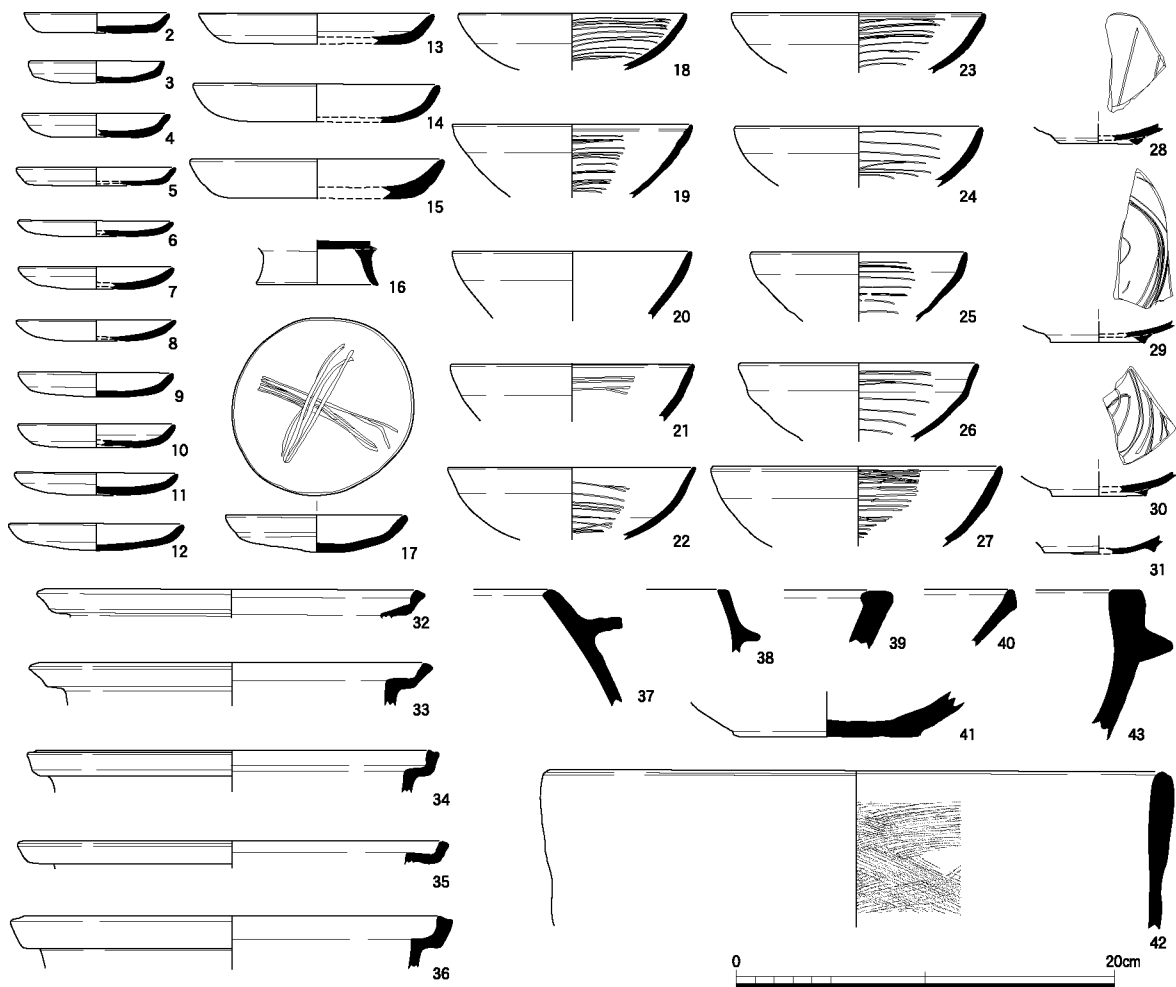


図12 中世整地層出土土器類・石製品実測図(1:4)



後を中心とする小型と、口径12～13cmの大型に二分される。内面はナデ、口縁部外面はヨコナデ、体底部外面は指頭で押えるのが全体に通有の器面調整技法である。17は瓦器皿、18～31は瓦器椀である。瓦器椀は口径は13cm前後が中心で内面に暗文を粗く施す。図示したものはすべて外面に暗文は無い。高台は粗雑な作りで低い。また、高台の無い瓦器椀の底部破片は見だしていない。32～36は瓦質土器鍋の口縁部である。39は瓦質土器の鉢口縁部か。37と38は土師器釜口縁部である。40は須恵器片口鉢の口縁部、41は須恵器片口鉢の底部である。42は口縁部が直立する形態の土師器である。内面に炭化物が付着するため、煮沸具であると思われる。43は滑石製の石鍋である。

### (3) 江戸時代の瓦類

江戸時代の瓦類は、長軸長3.0cm以上の破片で7,698個、582,710gが出土している。ほとんどが東曲輪北外堀近くの柱穴群や植樹跡もしくはその付近から出土で、土蔵跡からの出土は微量である。また、淀築城期の整地層である堤状盛土および砂礫層から瓦類は出土していない。したがって、今回調査で出土した瓦類は、大半が東曲輪外堀南肩上の塀の屋瓦に用いられていたものと考えられる。全出土瓦のうち約半数の3,844点は、種類が不明である。種類が判明している3,854点中では、丸瓦と平瓦が大半を占め、塀瓦が一定量出土している。塀瓦は、今回出土した平瓦系瓦（軒平・平・軒棧・棧・塀）の総量2,277点のうち約1割を占めている。軒棧瓦・棧瓦は極めて微量である（表4）。また、棟丸瓦や輪違瓦が出土している。棟丸瓦は瓦当が残るものはいずれも菊花文で17世紀前半から中頃の様式的特徴を示す。輪違瓦は胎土と焼成が棟丸瓦と良く似ており、棟丸瓦と同時に生産された可能性がある。刻印資料は3点ある。「」の記号印、二重円形圏線内に「上」とする文字印、長方形圏線内に「津井組合/福

喜一郎」とする人名印がある。いずれも平瓦の小口に捺す。「津井組合」とある人名印は近代以降のものであろう。なお、金箔瓦は出土していない。

出土した瓦類のうち、代表的な軒瓦類を図示し（図13、図版6）概説する。44～51は菊花文の棟丸瓦である。いずれも周縁が無く、残存する中房はボタン状である。瓦当の菊花文は、44～47は凹弁八葉二重菊、48は凹弁八葉一重菊、49～51は凹弁十六葉一重菊である。すべて17世紀前半代の特徴を示す。凹弁八葉二重菊は瓦当が比較的厚く、凹弁八葉一重菊と凹弁十六葉一重菊は瓦当が比較的薄い。52～58は軒丸瓦である。52～57は巴文で、57は巴の尾部が接する型式である。58は無文である。59～65は軒平瓦である。いずれも均整唐草文であるが、中心飾は様々である。

表4 江戸時代瓦類破片計測表

種類	破片数		重さ	
軒丸瓦	40個	0.5%	6,495 g	1.1%
軒平瓦	18個	0.2%	4,132 g	0.7%
丸瓦	1,457個	18.9%	124,947 g	21.4%
平瓦	1,978個	25.7%	197,433 g	33.9%
棧瓦	23個	0.3%	5,950 g	1.0%
熨斗瓦	12個	0.2%	1,493 g	0.3%
塀瓦	257個	3.3%	37,643 g	6.5%
棟丸瓦	36個	0.5%	3,230 g	0.5%
輪違瓦	28個	0.4%	1,693 g	0.3%
袖瓦	2個	0.1%	781 g	0.2%
軒棧瓦	1個		18 g	
棟端瓦	1個		51 g	
雁振瓦	1個		310 g	
不明	3,844個	49.9%	198,534 g	34.1%
合計	7,698個	100.0%	582,710 g	100.0%

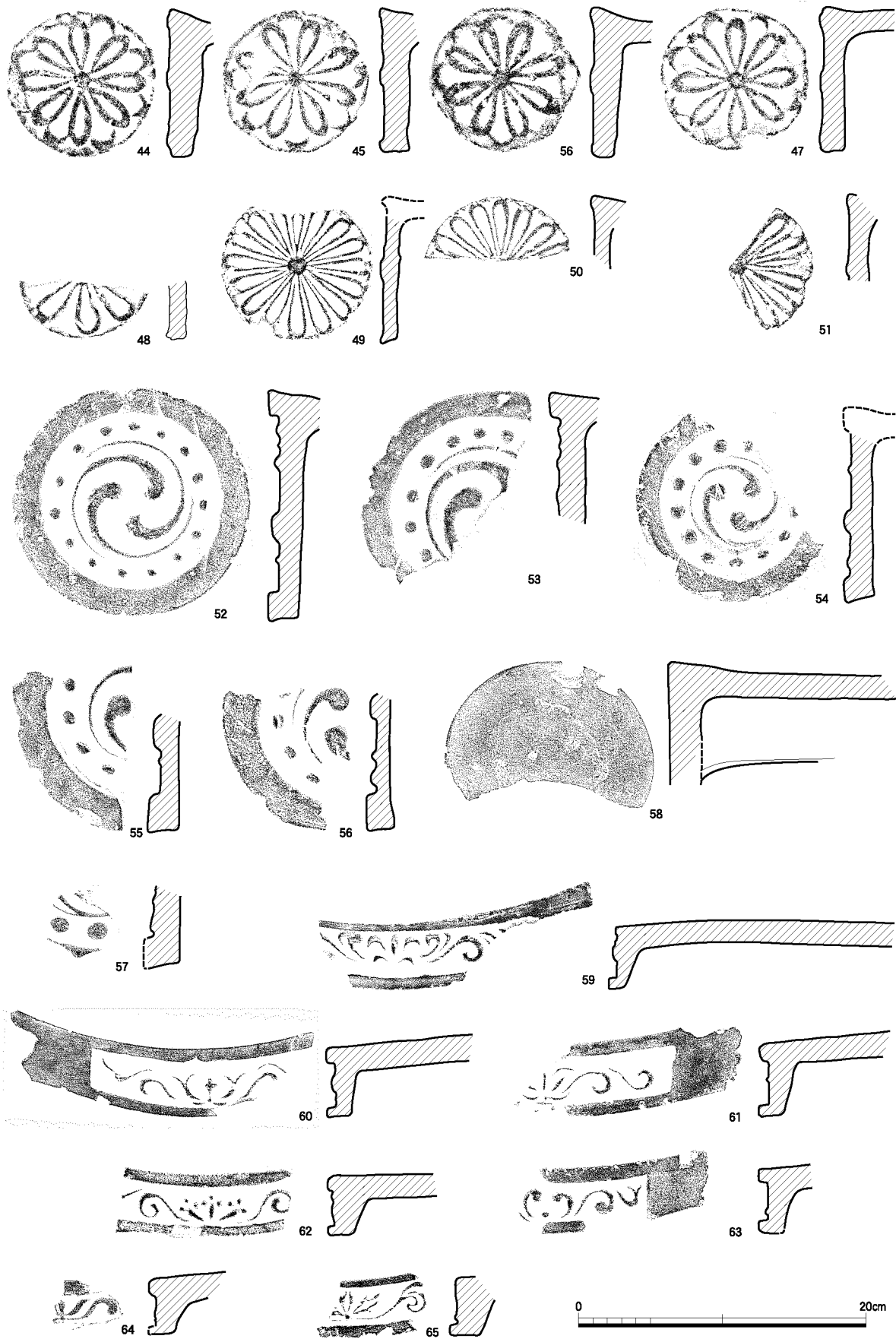


图13 江戸時代軒瓦類拓影・実測図(1:4)

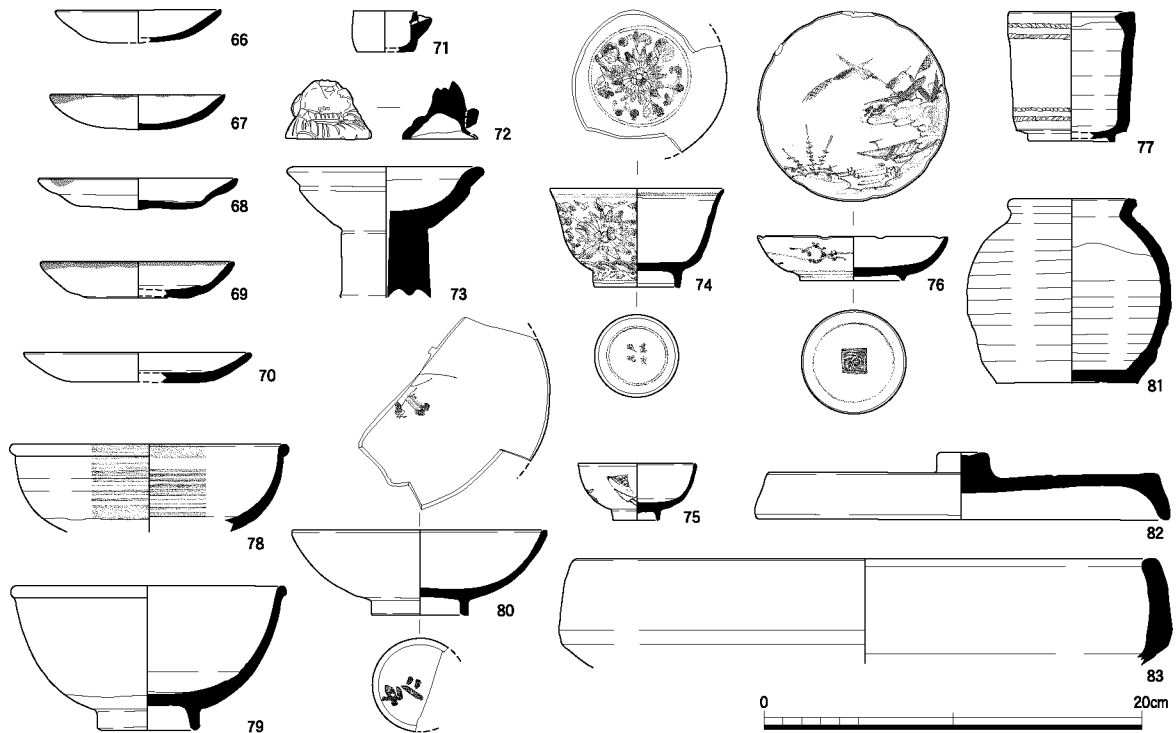


図14 ゴミ穴4出土江戸時代土器陶磁器類実測図(1:4)

#### (4) 江戸時代の土器陶磁器類・その他の遺物

江戸時代の土器陶磁器類は、江戸時代の各遺構から少量ずつ出土している。まとまりのある資料は少なく、全体的な出土量も少ない。これは、調査地付近で食・住生活が活発でなく、土器陶磁器類の消費が頻繁になされなかったことを示すものであろう。

まとまりがある唯一の土器陶磁器類として、ゴミ穴4から出土した資料(図14、図版7)があり、18世紀前半から中頃のもので概説する。66~69は土師器皿である。66以外は口縁部に煤が付着し灯明皿として使用された状況がうかがえる。70は軟質施釉陶器である。土師器皿と同様の器形に褐色の釉を掛ける。これも口縁部に煤が付着する。71は土師質のミニチュアで片口の器形を模している。72は土師質の人形である。釉薬はなく、彩色も残らない。頭部を欠き、立膝の座像で荷を背負う。型作りで、内面の凹部に指頭圧痕を残す。荷の意匠は貼付ける。西行像か。73は土師質の瓦灯である。74~77は肥前系磁器である。74は染付椀、75は上絵付の小杯、76は染付の輪花皿、77は青磁の火入で内面は無釉である。78~81は施釉陶器である。78は肥前系の刷毛目鉢で底部外面は無釉である。79は肥前系のオリーブ灰色刷毛目風の鉢で見込みは蛇ノ目釉剥ぎとする。80は京焼風肥前系の平椀で、底部に「セ」の墨書がある。81は信楽系の壺で、外面全体に褐色釉を施し、内面は無釉である。82と83は土師質土器で、82は火消壺の蓋、83は焙烙である。ゴミ穴4からは、上記以外に土師質土器デンボ・ツボツボ、信楽系焼締陶器甕、瓦類、鉄釘、石製硯、84の銅製水滴(図15)などが出土している。また、他の遺構から、銭貨、真鍮製の煙管、骨製の茶入蓋などが出土している。

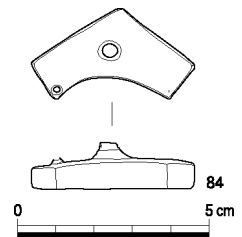


図15 ゴミ穴4出土水滴実測図(1:2)

## 5.まとめ

下層の中世整地層の検出は、淀の中島（現在の京阪淀駅周辺）に中世の人々が暮らした明確な証拠となるものである。今回調査の出土遺物からみれば、調査地付近は、10世紀初頭頃から開発が始まり、13世紀に飛躍的に発展する状況が観取できる。また、13～14世紀の整地層直上に17世紀に淀城が築かれており、15～16世紀の遺物はまったく無い。

平安京から淀川水系を介して西国に通じる港湾である淀津は、9世紀以降史料に見える。11世紀には、桂川右岸の「東淀」（現在の大下津・水垂付近）に対して左岸の「西淀」（現在の淀・納所周辺）の呼称が見え調査地付近の発達を確認できる<sup>12)</sup>。12世紀末には平安京の塩・相物の卸しを一手に掌握する「淀魚市」が史料上に現れる<sup>13)</sup>。「淀魚市」は淀中島（現在の京阪淀駅付近）に存在したとされる。また、「淀魚市」は応仁の乱後急速に衰え、16世紀前半を最後に姿を消す<sup>14)</sup>。限定的ながら今回調査で得られた下層遺跡の所見は、史料上に見える「淀魚市」の盛衰と照応するようと思われる。今後の調査で、下層遺構の広がりや性格などを明確にしてゆく必要がある。

今回の調査では、淀城東曲輪北端部の状況を具体的に明らかにできた。長大な土蔵跡は、淀城を描いた江戸時代の数種の古絵図に描かれている。とりわけ、『山州淀城府内之図』（京都府立総合資料館蔵）は、この建物を「米クラ」と記し、『朝鮮人来聘記 付図』（18世紀中頃）は「米蔵」と記す<sup>15)</sup>。また、淀城と城下町の様子を詳細に記録した渡邊善右衛門守業の『淀古今眞砂子』（18世紀中頃成立）は、東曲輪の「北へいきわ」に「米蔵」が存在することが明記している<sup>16)</sup>。以上から、今回調査で検出した土蔵が淀城内の米蔵であることは明らかである。さらに、17世紀後半の景観を描いたとされる『笹井家本 洛外図屏風』や永井尚政藩政時代（1633～1669）の絵図である『淀城大絵図』にも類似の建物が描かれている<sup>17)</sup>。したがって、この「米蔵」が17世紀後半にすでに存在していたことがわかる。しかし、今回検出した土蔵跡からはこの建物の建設年代を知り得る遺物を得ていない。

土蔵跡の北側には植樹跡を検出した。これについても『淀古今眞砂子』に「蔵の後松なみ木」という記載がある<sup>18)</sup>。また、前出『朝鮮人来聘記 付図』にも松並木らしきものが描かれている。これらの史料から、18世紀の中頃には東曲輪北端部に松並木があったことが明らかである。2箇所の植樹跡からは一定量の遺物が出土しているが、据え穴と抜き穴の判別ができず、植樹の年代を特定することはできなかつた。史料との関連が注目されるところである。

調査地北部で多量に出土している瓦が、東曲輪北外堀内側の堀に葺かれていた可能性が高い旨は前述したが、出土瓦類の組合せから屋根構造が類推できる。多量に出土している丸瓦と平瓦は淀築城期からこの堀が本瓦葺であったことを示すものである。出土している棟丸瓦は周縁の無い型式で、17世紀中頃までのものとする。棟丸瓦とよく似た胎土と焼成の輪違瓦とともに、築城期かそれに近い時期から堀の棟を飾っていたものとする。出土平瓦系瓦類のうち約1割を占める堀瓦は、18世紀以降のある時期に堀の屋瓦が本瓦葺から堀瓦葺に変わったことを示すものであろう。また、多数検出された堀の控柱痕は、この堀が何度かの建替や修理を経て、明治の廃城まで

維持されたことを示している。なお、堀ぎわの同様の柱穴群は、1990年の試掘調査でも確認されている。<sup>19)</sup>

淀城東曲輪は1.5m以上の盛土を行って構築していることが明らかになった。また、盛土にあたっては、(1) 近くに豊富な川原の砂礫を用いたこと、(2) 砂礫による盛土に先立って外周を自然堤防上のシルト質の土砂を用いた堤を築いて固めていることなどが明らかになった。上記土蔵跡の大規模な布基礎と礎石跡は、軟弱な砂礫盛土に大型建物を築くために必要とされた特殊な地業と見なすことができる。川と池水に四周を囲まれた淀の地形的特質は、こうした盛土と地業のありかたをよく説明するものである。1990年の試掘調査では、石垣近くの整地層が「丁寧かつ強固」なものとされ、整地層の堆積は堀側に向かって傾斜していると報告されている。<sup>20)</sup> こうした所見は、今回調査の堤状盛土と同様であり、内高嶋も東曲輪と同様の土木工事が行われていた可能性が高い。砂礫層を用いた盛土も淀城の各所で確認されている。1996年2月に実施された本丸と二ノ丸の境界付近での試掘調査では、淀城期の整地層が「明黄褐色砂」であることが判明している。<sup>21)</sup> 1987年9月と1989年1月に実施された三ノ丸での立会調査、1988年9月に実施された二ノ丸での立会調査では、現地表面から0.5～0.6mで「砂層」が確認されている。<sup>22)</sup> 以上から、本丸、二ノ丸、三ノ丸などの淀城の主郭部分でも、今回調査で判明したような砂礫を用いた盛土がなされている可能性が指摘できる。また、1988年1月と1989年9月に実施された淀下津町の立会調査でも、現地表から0.8～1.2mで「砂層」が確認されている。<sup>23)</sup> 城下町にも同様の土木技法が及んでいた可能性もある。

以上のように、今回の調査では淀城期の遺構を検出しただけでなく、淀城築城時の土木工事の技法を明らかにした。さらに、中世淀に関連する遺跡の存在を確認した。いずれも重要な成果といえよう。

#### 註

- 1) 小野晃嗣「卸売市場としての淀魚市の発達」『日本中世商業史の研究』法政大学出版局、1989年5月、200～247頁。
- 2) 京都市編『京都の歴史4 桃山の開花』学芸書林、1969年10月、272～274頁。
- 3) 京都市編『京都の歴史6 伝統の定着』学芸書林、1973年3月、53～58頁。および、西川幸治編『淀の歴史と文化』淀観光協会、1994年9月。
- 4) 星野猷二編『淀城跡・天守台調査概報』伏見城研究会、1988年3月。
- 5) 星野猷二編『淀城跡・天守台調査概報』前掲。
- 6) 中村石材工業株式会社編『淀城跡石垣改修工事報告書』京都市建設局公園緑地部公園管理課、1990年8月。
- 7) 久世康博「淀城跡(TB29)」財団法人京都市埋蔵文化財研究所編『京都市内遺跡試掘立会調査概報平成2年度』京都市文化観光局、1991年3月、46～54頁。
- 8) 久世康博「淀城跡(TB29)」前掲。
- 9) 馬瀬智光「淀城跡 No.21」京都市埋蔵文化財調査センター編『京都市内遺跡試掘調査概報 平成

8年度』京都市文化市民局、1997年3月、31～36頁。

- 10) 馬瀬智光「長岡京跡・淀城跡 No.17」京都市埋蔵文化財調査センター編『京都市内遺跡試掘調査概報 平成15年度』京都市文化市民局、2004年3月、33～36頁。
- 11) 久世康博「淀城跡(TB29)」前掲。財団法人京都市埋蔵文化財研究所編『京都市内遺跡立会調査概報 平成11年度』京都市文化市民局、2000年3月。
- 12) 「〔御堂関白記〕寛弘六年十月五日」京都市編『史料京都の歴史16 伏見区』平凡社、1991年1月、653～654頁。
- 13) 小野晃嗣「卸売市場としての淀魚市の発達」前掲。および、大村拓生「中世前期の鳥羽と淀」『日本史研究』459号、2001年11月、1～29頁。
- 14) 小野晃嗣「卸売市場としての淀魚市の発達」前掲。
- 15) 小林大佑「朝鮮通信使と淀城下町」(西川幸治編『淀の歴史と文化』前掲、56～62頁)に「朝鮮通聘礼使淀城着来図」として掲載されている。
- 16) 渡邊善右衛門守業「佐倉古今真砂子・淀古今真砂子」原田伴彦・竹内利美・平山敏治郎編『日本庶民生活史料集成』三一書房、1969年11月、767～835頁。
- 17) いずれの絵図も、西川幸治編『淀の歴史と文化』(前掲)に掲載されたものを参照した。
- 18) 渡邊善右衛門守業「佐倉古今真砂子・淀古今真砂子」前掲。
- 19) 久世康博「淀城跡(TB29)」前掲。
- 20) 久世康博「淀城跡(TB29)」前掲。
- 21) 馬瀬智光「淀城跡 No.21」前掲。
- 22) 久世康博「淀城跡(TB29)」前掲。
- 23) 久世康博「淀城跡(TB29)」前掲。

# 圖 版

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ながおかきょうあと・よどじょうあと							
書名	長岡京跡・淀城跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2003-13							
編著者名	内田好昭							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうあと 長岡京跡 よどじょうあと 淀城跡	きょうとしふしみく 京都市伏見区 よどいけがみちよう 淀池上町	26100	1191	34度 54分 08秒	135度 43分 28秒	2003年11月 13日～2004 年1月21日	280m <sup>2</sup>	店舗新築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長岡京跡 淀城跡	都城跡	平安時代 ～鎌倉時代	整地層	緑釉陶器、土師器、須 恵器、焼締陶器、輸入 陶磁器、瓦類、石製品				
	平城跡	江戸時代	土蔵跡、柱穴群、 植樹跡、ゴミ穴、 築城時整地層	土師器、焼締陶器、陶 器、磁器、土鈴、人形、 ミニチュア容器、石製 品、金属製品、骨製品、 瓦類				



京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-13

## 長岡京跡・淀城跡

発行日 2004年3月31日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 075-256-0961